

都市と周辺地域とのつながりにおけるアンカラ⁽¹⁾

ヒュリヤー・タシユ（齊藤優子 訳）

都市とその周辺地域の定住論という視点での検討は、二つの観点から行うことが可能である。第一には、ある一定の時代の条件内で定住単位の大きさそれ自体からであり、二つ目は、都市とその周辺地域が担う機能的観点における他の地域との関係からである。この関係は、行政、社会、経済の側面をも示している。この中で、今回、再検討するのは、経済活動の観点からの関係である。

この報告においては、オスマン朝時代のアンカラについて検討する。まず初めに断っておくが、オスマン朝時代といっても六〇〇年間を扱うわけではない。というのは、この六〇〇年間という期間が、その全体を通して共通する特徴を示すわけではないためである。私自身の研究が一七世

紀のアンカラと関連していることから、特にこの一七世紀という時代に焦点をあてることとする。一七世紀というのは、周知のとおり産業革命以前の時代であり、この時代の技術の最も基本となる特徴は、動力が人間と動物の力に頼っていたことである。

オスマン朝の組織が変化する過程で一七世紀の都市としてのアンカラは、初めはアンカラ県 (sancak) の中心地であり、さらにはこのアンカラ県にある同名の郡 (kaza) の中心地もあった。(訳者注 sancak や kaza の名称はその県や郡の中心地の名で呼ばれる) オスマン朝の行政区分では国 (ülke)、州 (eyalet)、州内部にある県に分けられていた。この地方行政区分は、軍事制度 askeri-dan との関連にし

たがって構成されたものであった。また、オスマン朝の制度では、県の内部に司法行政としての機能を持つ郡と呼ばれる単位があり、アンカラは県の中でこのような郡の中心地でもあった。つまり、アンカラ県はアナトリア州内部において県と郡、すなわち *sancak*（県）と *kaza*（郡）という軍事制度上と司法行政上の二つ中心地であるという特徴をもっていた。しかし、同時代のアンカラは周辺の県との境内にある近郊の集落との経済活動によってその存在を支えられていた。すなわち、アンカラ周辺の近郊集落がアンカラに集まる農業以外に従事する人口を供給した。アンカラもまた都市部の分業作業によって生産された手工業品をこれらの近郊集落での需要にこたえるべく供給していた。

これ以外にもアンカラは中心地として別の経済活動の面もあり、これは県の境界を超えてアンカラ中心の総体的経済体制を構成するようになっていった。この経済活動の中では、アンゴラ山羊の毛から作られるソフと呼ばれる生地が織られていたことが確認できる。このソフと呼ばれる織物は、アンカラとその周辺地域のみならず、オスマン朝の帝都イスタンブルをはじめ多くの都市や東西の国々と取引がなされていた。

これらの点から、上述した時代においてアンカラとその周辺地域の間では三段階の成長過程をみることができる。

この報告の特徴は、この三段階の過程を明らかにすることにある。その三段階の過程とは、まずアンカラとその周辺地域が関連を築きあげる段階、次にアンカラが県の枠を超えた中距離程度離れた地域との関連を持つ段階、そして最終段階としてオスマン朝領内の他の都市や国外など遠距離地域とのつながりを持つようになる過程である。

一 近距離の地域との関係 県と郡

前述したように、オスマン朝においては軍事制度に基づく区分として州と県を分ける一方で、司法行政の単位としては郡としての区分を設けていた。このようにして、地方で適用されたこの県郡制の組織化によって中心地には、州と県の長としてベイの称号を持つ者を任命し、郡の長には司法局 *adilvan* の権限を与えられたエフエンディの称号を持つイスラーム法官 *kadi* を任命した。

オスマン朝ではティマール制が適用されている土地における管轄の基本となつたのは県である。ティマール制とは、一種の軍事封土制で軍事制度と地方行政および徴税制度をかねた国政の根幹の制度であり、国土を階層的な軍管区に区分し、軍事封土として配分することでその土地の徴税権利を俸禄として与えていた制度である。アンカラもまた

ティマール制が適用された地域であり、一四六二年まではアナトリア州の長官であるパシヤが配置された県の中心地であり、それ以降は州の中心地がキュタフヤに移動されたため単純な県としての機能をもつのみとなり、一九世紀に新しく整備されるまでは、この特徴を保ち続けていた。我々が調査した時代において、行政区分の観点からアンカラが県郡制度化される上で大きな違いは見られなかった。つまり、アンカラは、県に付属するアヤシユ (Ayas)、『バジユ (Bacı)』、『チュブツク (Çubuk)』、『カサバ (Kasaba)』、『ムルタザバド (Murtaşabad)』、『そしてヤバナバド (Yabanabad)』からなる合計六つのティマール制による地区によって構成されていた。また、この状態は司法行政による区分となる郡の編成にも当てはまるものだった。この関連において、アンカラ県は一七世紀を通して九つのイスラーム法官による管轄区に分割された。これらの九つのイスラーム法官の管轄区域は、『アンカラ (Ankara)』、『チュブツク (チュブカバド Çubukabad)』、『チュクルジャク (Çukurcak)』、『ムルタザバド』、『ヤバナバド』、『シヨルバ (Sorba)』、『チヨルバ (Çorba)』、『アヤシユ』、『バジユ』と『アンカラの遊牧民』 (Yörükân-Ankara) であつた。⁽³⁾ 一七世紀にはいっても、行政の組織化も技術的な意味での変化も発生しなかったがためにこの県郡制度にもまた、さほど大きな変化がみられなかった。場

史苑 (第七〇巻第一号)

所的な意味では同じ名称を持つ県の中心であるアンカラ市 (Ankara şehir) は、一方では県の境界内部にあり近郊として特徴づけられる近郊集落によって支えられ、他方ではこれらの近郊地域を管理するという関係にもあつた。

行政と同時に司法を司る郡役場の場所が特定され始めたことは、その時代の技術をもって人力あるいは動物の力で、日のあるうちに移動できる距離を計算にするようになったためと考えられる。例としては、アンカラ郡の中心地からイスタンブルまで馬に乗って九二時間はかかるが、同じ県内の他の郡であるアヤシユまでは九時間である。⁽⁴⁾

アナトリア州の県の一つであるアンカラには、その内部のつながりを保つ駅伝制度があつた。アンカラと近郊との関連を示す地図において見られるように、アンカラとアヤシユの間は馬で九時間、チュブツクとの間は六時間の距離である。他の郡に関しては、それらの郡の統治地域の中にある定住単位の間での大きな相違やここから発生した段階についてはここでは言及しない。ただし、町役場が内部では同様の点で影響していたことは明らかである。

アンカラ県を別の観点から考察すると、先ほど言及した六つのティマール地区と九つのイスラーム法官による管轄区の中で、明らかに都市 (şehir) あるいは町 (kasaba) の中心地となつたのは、アンカラをはじめとしてチュブツク

都市と周辺地域とのつながりにおけるアンカラ（ヒュリヤー）

ク、アヤシユ、ヤバナバドであった。アンカラは一七世紀以前もこれまで言及してきた一七世紀においても県の、そして同様にアンカラの名で知られる郡の中心地でもあった。アンカラの周辺にはムルタザバド、シヨルバ、チュクルジャク、バジュ、ヨリュク（Yörük）ここでは前述「遊牧民のアンカラ」の略）のような様々な郡があった。これらの郡の一部は時として、アンカラ郡に属したが、時にはまったく別の独立したイスラーム法官による管轄区となることもあった。しかし、これらすべての郡の共通の特徴は、

位置のイスラーム法管区の管轄以外に、遊牧民のイスラーム法管区を示すことであり、それぞれの統治区域内で中心をなす町を作らなかつたことである。このイスラーム法管区には大きさを一つ一つ記録することができないごく小さな村、耕地、遊牧民集団の地（Yörük Cemâ'atü Yurdu）として記録に残された定住地があった。そのためイスラーム法官たちは、一定の場所に居住せず統治区域内にいる者についてはおそらく、臨時の司法局に属する地方役人らとともに巡回しながらその任務を遂行していたと考えられる。

一方ではまた、アンカラ県の境界内で「アンカラの遊牧民」という名を持つ郡の役所があり、この名称からも分かるとおり、まさに遊牧民のためのイスラーム法管区であった。これは、移動しない遊牧民イスラーム法管区（Yörük

Kadıgı）である。アンカラ県の南西には、ハイマナトウシ（Haymanateyn）あるいはハイマナーイーケビール（Haymana-i-Kebr）ハイマナーイーサギール（Haymana-i-Sagin）という名で知られた地区があり、様々な遊牧民集団が生活していたが、次第に村（Koy）での定住化が加速していったと考えられる。一七世紀以前のこれらの地域は、遊牧民の郡の境界内にあつたが、一七世紀にはアンカラ郡の中の一つの地区となつた。

これまで述べてきたようにアンカラ県は、元々広大な郊外の土地を基礎にして築かれた県であり、その内部で農業活動以外に分業手工業によって生産活動が行われる町と都市の数は非常に少なく、この広大な農地でたつた一つの中心地がアンカラだったのである。そのため、県内部の人口の多くがアンカラに集中していた。アンカラ以外に先ほど述べた町の中で的手工業活動に目を向けたとしても、これらのほとんどが小さな集落の様相を呈していたと思われる。アンカラは、このため当該地域の最も重要な行政都市であつた。そして県の中心地であり、そのもつとも大きな郡でもあつたという特徴から、アンカラは周辺の郡にも行政サービスを行つていた。

他の地域との関連も、このような状況とともに一体化していく中でアンカラの重要性はさらに増し、当該地域のみ

ならずアナトリアの、そしてオスマン朝の中でも大都市の一つとして数えられるようになっていった。

簡潔に言うならば、オスマン朝の都市の近郊地域との関連は、行政の組織化が決定するといえよう。これは、すべてのオスマン朝都市において共通の特徴ではあるが、中・遠距離地域との関連においてはすべての都市に当てはまるといふわけではなかった。また、この二つの関連の側面にとつては、都市と周辺における明確な生産活動が実行される必要があるであつた。そして、アンカラの中・遠距離地域との関係を明らかにしていく基本的な要素とは、当該地域で盛んな生産と商業活動の中心であつたソフとこの生産活動に関して組織された徴税請負制（ムカーター、*mukata'a*）であつた。この点について、次の項でより明らかにして行くかと思ふ。

二 中距離地域との関連 ソフの生産とその取引

アンカラの広い地域内で中程度の距離をおく地域との関連を明らかにする活動は、ソフの生産と取引である。ソフは、現在私たちの知っている言葉で言うならばモヘアのことである。アンゴラ山羊は、中央アナトリアでは北はカスタモヌ（Kastamonu）、南はハイマナラル

(Haymanalar)、東はエルマダー (Elmadag)、チャンクル (Çankır)、そしてカレジック (Kalecik) から西ではベイパザル (Bey pazarı) とシプリヒサル (Sivrihisar) まで広がる広大な地域で見られた。また、この動物は、アンカラ県の周辺の複数の県内にある都市や町をも含む広大な地域で何百年間も特質化された。このため、概念としてのこの地域は新しく、またそれらの地域はアンカラを中心とする生産活動地域であつた。この生産活動地域とアンカラ中心による統合を支えるため、オスマン政府は別の生産管理システムを用いていた。このシステムが、ムカーターと呼ばれる徴税請負制である。

このムカーターは、最も一般的な意味ではこのように説明することが可能である。アンカラとその周辺で織られたソフと呼ばれる織物は、最終段階の加工がアンカラで行われた。織られた織物は商品価値を出すためアンカラでプレスされ、艶出しされていた。また、織物を染色するための染色小屋もアンカラにあつた。そのため、地元とそれ以外の商人たちは織物をアンカラで買い付け、需要のある場所へ運んでいった。当該地域で生産された織物が、アンカラで売買されたため、その税金を徴収するのにもまたアンカラであつた。織物から税金を徴収するとき、その証明として押された印は徴税記録の中でソフ印として通用していた。

都市と周辺地域とのつながりにおけるアンカラ（ヒュリヤー）

一方で、税金はプレスと染色の過程でも徴収されたため、時にはプレス税、染色税としても知られており、ムカーターの徴税請負人であるミユルテジム（mültezim）は当該地域のすべての徴税に権限を持っていた。地域内のどの町や都市でもアンカラの関税を徴収する徴税請負人のおよび知らぬところでの売買は罷り通らなかつた。そのため、徴税請負人はただ徴税にかかわるだけでなく、この活動のすべての段階における仕事とそこで雇用される人々に関して一貫した権限を持つ存在であつた。その権限は、先に言及したイスラーム法官とともに当該地域で行使された。そのため、関税とそれに関連する史料は、私たちにアンカラの距離程度の地域との関連を考えるための道しるべとなっている。他方、この史料は私たちに、当該地域の経済的側面からなされた利益と、その利益の内訳でアンカラの物理的拡大を示してもいる。この請負制を必要に応じて利用した徴税請負人たちは、ただ徴税の管理を行うだけでなく、同時に特別な権限をもつことによつて二つの方面で任務を担っていたことがわかる。

三 遠距離地域との関連…ソフの生産とその取引

ソフの特徴は、幅広い用途で使用できる織物であつた

めオスマン朝において大変需要のある経済商品となつたことであつた。この織物は、アンゴラ山羊の毛質が長く平たいために輝くことが特徴であり、オスマン朝の富裕な層で使用された商品であつた。例えば、財産管理台帳において富裕層の遺産の中に数多くのソフから作られた外套が見つかることなどが挙げられる。一方で、シャル（註）（註）（註）（肩掛け類）やギョムレクリッキ（gömlük 訳注…シャツ用布）と呼ばれる細い二級品のソフは下着などに使用されてきた。また、アンゴラ山羊の毛は軽く、油気があるため雨具にも使用されていた。衣料品として使用される一方で、ソフはその丈夫さから船の帆として使用されており、造船局も購入する商品であつた。さらにヨーロッパでは、一七世紀以降女性の間で大流行であつたボタン、かつら、カーテンを作るためにソフが使われていた。そのため、アンカラの中心地で生産されるソフは、国内需要とともに国外でも需要が高い商品であつた。例えば、宮廷での購入はたいてい徴税請負人に委任されていた。様々な色やデザイン（註）の織物は宮廷の仕立て屋に持ち込まれ、船の帆となる布は造船局に送られていた。これとともに商人たちは、一般の人々のためにもイスタンブルに運んできた商品を小売店に卸し、小売商人は馬などで商品を輸送していた。外国の商人たちは一定の時期に、特に旅行しやすい夏の間にアン

カラまで整備された隊商路を集団でやってきて、長期間アンカラに滞在していた。時折、この滞在は非常に長引き、アンカラの宿泊施設に泊まる代わりに、居住区に家を借りることもあった。これについては、特に登録台帳で多くの史料が見つかっている。

まさにこのメカニズムが作り出したのが都市の長期離間における関連であり、広大なオスマン朝においてイスタンブルをはじめとする国内の遠隔地域や、国外地域との関連についてという主な二つの点に触れたいと思う。

四 イスタンブルとその他の大都市との関連

宮廷をはじめとして多くの大都市で、特に上流階級の間でのソフの商品としての需要があったことは、アンカラがイスタンブル、イズミル、アレツポなどの大都市と一定の商業上の取引関係を築く理由となった。この関係がどのように発達し、どのような結果をもたらしたのかについては台帳史料で明らかにすることができる。

例としては、一六八二年六月一八日にアンカラのイスラーム法官およびアンカラの関税徴収官に対して、宮廷がソフの需要に対応する勅令を送っていたことが挙げられる^③。この勅令では、どの色でどれだけの数、どの等級であ

るかを示したソフが、関税長官の仲介によって売買されることと、売買前にイスタンブルに輸送されることが求められていた。勅令が裁判所に届いた後、求められたソフが誰からいくらかで確保されたのかというような、どのような過程を経たのかという詳細を示す史料は今のところ見当たらない。しかし、ここで全体を通して重要であるのは、アンカラと周辺地域で生産され、国外に輸出されるソフの一部が宮廷用に別に分けられていたということである。簡潔に言うならば、ソフの生産と取引の中心地であるアンカラと他都市との関連は、単にイスタンブルが限界ではないということである。アンカラは、イスタンブル以外にもアレツポやイズミルのような都市とも取引の関係を持っており、この関連網は同時代の史料に反映されている。

五 国外地域との関連

アンカラでの関税徴収官によるソフの生産と取引は、アンカラやアナトリア、ルメリが限界ではなかった。ソフは、アンカラ商人も外国商人も国際的に取引する商品であった。一六世紀にはベネチアにソフの取引のために赴いたアンカラ商人がいたように、同時期にはアンカラでベネチア、ポーランド、イギリスの商人たちが相当教活動していたこ

都市と周辺地域とのつながりにおけるアンカラ（ヒュリヤー）

とが知られている。¹⁰⁾

ソフの生産と取引は、一七世紀においても継続してアンカラが遠距離地域との関係を保った最も重要な要素として特徴づけられているといえよう。この状況は、一七世紀中ごろと後半の台帳史料における関税の徴収について言及された史料からもうかがうことができる。関税徴収官あるいは徴税請負人と国庫の間で行われた契約の結果与えられた特許では、請負の条件を明らかにし、外国人商人と関係するいくつかの項目が加えられることが見られる。

一六五四年五月八日 (20 Cemâziye'lâhr 1064) 付けの特許では、どの点においてどの製品からどれだけの関税をかけるのかを明らかにしつつ、ポーランド商人についても記述されている。¹¹⁾ ここで注意すべき点は、一六世紀には富裕であることで知られたベネチアとイギリスの商人たちには言及せず、ポーランド商人のために別の項目を扱っていることである。その理由は、一七世紀のアンカラでもっとも頻繁な取引をしていたのがポーランド商人だったためである。

さらに史料から分かることは、以前はアンカラで見られなかったオランダ商人もまた一七世紀末以降ソフの取引による利益を求めたということである。¹²⁾ 一八世紀初頭に入ると、ソフの取引のためアンカラにやってきたオランダ商人

は居住期間を延長し、宿泊施設で泊まる代わりにアンカラで自分たちの家を購入するということが史料に見られる。¹³⁾ 一七世紀にはソフの取引と共に、ヨーロッパ人商人の需要がアンゴラ毛糸に移行したことによって、イギリス、フランス、オランダ商人たちが製品の荷積みのためイズミル港に錨を下ろし、多くの船が見受けられた。こうして一七世紀におけるアンゴラ毛糸は、イズミルにとっても大変重要な輸出製品となったのであった。¹⁴⁾

ここまでの説明から、アンカラの他の地域との三つの異なる関連の中で、アンカラが一七世紀のオスマン朝において非常に重要な商業の中心地であったことは明らかである。このために、アンカラの人口は一七世紀にうなぎのぼりに増え、人口密度の高い都市となったのである。この人口の多い都市は、同時に商工業活動に従事する者、中央から派遣された役人、アンカラの近郊からやってきた短期滞在の人々、遠方からやってきたオスマン朝や国外の商工業従事者などで活き活きとした景観を見せていた。この状況が今日のアンカラの都市としての位置や宗教、社会、そして経済の構造に至るまで影響しているのである。

注

- (1) 訳者注 本稿は、二〇〇七年二月六日立教大学一二号館にて立教大学日本学研究所主催(立教大学史学科共催)で行われた Hülya Taş 氏(アンカラ大学歴史地理学科講師・現准教授)の報告“Kent ve Çevre İlişkileri Bağlamında Ankara”を翻訳したものである。
- (2) Özer Ergeng, *Kent Tarihçliğine Katkı: Ankara ve Konya*, Ankara, 1995, p.182, 注 3.
- (3) ASS 41: 427. 訳注 ASS : Ankara Şer'iyye Sicilli
- (4) Yusuf Halacoglu, *Osmanlılarda Ulaşım ve Haberleşme (Menziller)*, PTT Genel Müdürlüğü Yayınları, Ankara 2002, p.85. この史料の補充にこのことは次書を参照。 Hülya Taş, *XVII. Yüzyılda Ankara*, TTK Yayınları, Ankara, 2006, pp.30-32.
- (5) オスマン朝のイスラーム法体制に基づいて構成された郡が、その内部における地域と県の特性によって分類されていることは周知の事実である。それに従って、最も大きい郡から最も小さい郡まで正しく順序づけられた全ての郡の大きさを、それらの郡に任命されたイスラーム法官の日給が明らかにした。二〇アクチェの日給を得ていたあるイスラーム法官は小さな郡に任命されており、県や州の中心となる市周辺で構成された郡には *menâzil* と呼ばれる高位のイスラーム法官が任命され、彼らの日給は三五〇から五〇〇アクチェであった。(Usnal Hakkı Uzunçarşılı, *Osmanlı Devletinin İlmîye Teşkilatı*, TTK, 2. Baskı, Ankara 1984, s.87, 95.) これらの日給は、一種の「心付け」*ithbarı* であった。既に知られてゐる通り、政府予算からイスラーム法官

史苑(第七〇巻第一号)

へはどのような形でも支払いが行われることはなく、イスラーム法官は携わった業務及びそれに關わる書類によつて *harc* の名目で料金を受け取つており、この料金が彼らの収入を構成していた。そのため、イスラーム法官の日給は、実際の彼らの収入状況を反映する以外にも、彼らのイスラーム法官としての階級を示す指標でもあった。アンカラ周辺の郡におけるイスラーム法官は、一般に低い日給の階級であった。(Ahmet Nezhi Turan, *Yabanöad Tarihini Ararken, Kızılcahanın Belediyesi Yayını*, Ankara 1999, s.32. また、一五二三年のアンカラ県におけるイスラーム法官の日給にこのことは、Hüseyn Çınar-Osman Günüşçü, *Osmanlılardan Cumhuriyete Çubuk Kazası*, Bülge Yayınları, Ankara 2002, s.136.) その理由は、これらの郡におけるイスラーム法官の業務がさほど忙しいものではなかったことに求められる。なぜなら、アンカラのような人口の多い都市の法廷でさえ日常の業務はごく限られたものであり、おそらくアンカラ周辺における郡においてはその傾向がより顕著であるゆえに、それらの郡に任命されているイスラーム法官が低日給の階級に属していたことも理解できるのである。また、この状況は我々に別の問題の回答の糸口ともなっている。知つての通り、今日我々の手に残されたイスラーム法廷記録 *ser'iyye sicilli* のほとんど全てはある地域の大きな中心地、あるいは重要性を持つ古い歴史的な町の周辺で構成された郡に属するものである。例えば、アンカラ県の内部には九つのイスラーム法管区があるにもかかわらず、アンカラの法廷記録台帳 *sicilli defteri* のみがある。(Ahmet Akgündüz, *Şer'iyye Sicilleri*, I, Türk Dünyası

都市と周辺地域とのつながりにおけるアンカラ（ヒュリヤー）

Arastırmaları Yaktı Kayımları, İstanbul 1988.) ヒュターベン
ディギヤール県の内部でも、ブルサやムダンヤの法廷記
録 *sicil* 以外にはないのである。しかし、ヒュダーベンディ
ギヤール県は、東にベイパザルとシヴリヒサル、西にペ
ルガマとクズルジャトウズラまで二五の郡を有していた。

(Özer Ergeng XVI. Yüzyılın Sonlarında Bursa(Yerleşimi,
Yönetimi, Ekonomik ve Sosyal Durumu Üzerine Bir
Arastırma, Ankara 2006.) これらの小さく、遊牧民イスラ
ム法管区の特徴を示す郡の法廷記録 *sicil* が見当たらないこ
とは、それぞれのイスラーム法官が書類の引継ぎを放棄し、
一つの場所に長く居住しなかったことに端を発するのであ
ろうか。あるいは、業務の重要性が極めて低いことやイス
ラーム法官の慣習に関することと相まって各地を *devr* (巡
回) しているゆえに、彼らが業務をそれぞれの案件のため
に個別の書類を作成したためなのだろうか。現在、この問
いに明確な答えを出すのは時期尚早であろう。県の内部に
おける全ての案件に関連した条例やそれに類する資料が中
心地となる郡の台帳に記録されたこと⁶⁾の郡であったも
納税者の案件は県長や軍管区長が朝廷に直接申請したこ
と、場合によっては県長や軍管区長が朝廷のイスラーム法
官にかわって、より小さい郡のイスラーム法官の決定に対
して控訴する役割を担っていたこと。おそらく、これらの
ために小さな郡における保存法廷記録 *sicil-i mahfuz* 呼ばれ
る台帳が見当たらないのであり、イスラーム法官が個別の
案件に関する書類に甘んじたのであろうと考えられる。

(6) ヒジュラ歴一三〇九年(一八九一—一八九二)の軍法道
路地図(Er-kân-ı Harbiye Yol Haritası)では、アンカラとそ

の周辺において、一七世紀のアンカラ県内で同様の町がい
くつかみられる。これらに唯一加えられたのは、イスタノ
ス(Istanos)である。イスタノスは一七世紀において、アル
メニア人が居住する大きな村であった。その村は徐々に拡
大し、一九世紀には町となった。今日では、スラクウルト
(Sulakyurt) 郡の中心地である。

(7) アンカラ山羊の毛がヨーロッパにおいてボタン作成に使
用されたことに関する情報は、Özer Ergeng 氏との共同研
究の結果行われた討論や報告にて Ergeng 氏自身が言及して
いる。氏の *Sofun Tarihi* (ソフの歴史) に関する研究が出
版された暁には、より詳細な情報が得られるであろう。こ
の報告を準備するにあたり、あらゆる類の情報と助力を与
えてくださった Özer Ergeng 氏へ、未出版の研究成果の情
報を使用することを許可してくださったことも含め感謝の
意を表す。一八世紀のイギリスにおけるボタン、かつ、
カーテンそして戦争工業品におけるソフの使用につい
ては次書を参照。Gülşay Webb Yıldırım, XVIII.Yüzyılda
Tıfık İpliğinin Osmanlı-İngiliz Ticaretindeki Yeri, Ankara
Üniversitesi Sosyal Bilimler Enstitüsü Yayınlanamamıs
Doktora Tezi, Ankara 2006.

(8) オスマン朝の交通網の組織化において、重要な役割
を担った荷運び商人たち、すなわち *mekkarîleri* (動物
の背に荷をくくりつけて運ぶ者たち) に関する研究に
ついては次書を参照。Unit Ekin, 17 ve 18. Yüzyıllarda
Osmanlı İmparatorluğunda Ulaşım ve Hattım Organleşmesi
Üzerine Bir Arastırma, Ankara Üniversitesi Sosyal Bilimler
Enstitüsü Yayınlanamamıs Doktora Tezi, Ankara 2002.

(9) 史料 (ASS 64: 332.) においては、次のようなことが望まれると記されている。

「以下の金銭的価値もあるものが、所有者の同意により一〇九三年アンカラ徴税局財政から贈られる。高級な緋色のソフ一〇反、朱色のソフ四反、退紅色のソフ三反、藤色のソフ四反、刈安のソフ二反、鴉茶のソフ二反、苔色のソフ四反、黒のソフ三反、薔薇色のソフ二反、蘇比のソフ一反、深紫のソフ二反、柿衣色のソフ二反、華色のソフ一反、合計四〇反それぞれ一反が三〇尺の最高級のソフであり、所有者から迅速に買い付け、納入され関係所管に受け渡しの上、昨日イスタンブルに輸送」

“*bahâsı ber-vech-i nakd 1093 senesi Ankara Tamgası Mukâtası mâlinden verilmeğe üzere ashâmunun rızaları ile 10 top sünh ve al sof ve 4 top tausun kamı sof ve 3 top açık şarâbı sof ve 4 top açık menuş sof ve 2 top açık yeşil sof ve 2 top fıstık yeşil sof ve 4 top açık nefti sof ve 3 top sıyâh sof ve 2 top gülgünü sof ve 1 top açık nârençî sof ve 2 top koyu menuş sof ve 2 top açık darçını sof ve 1 top mısır moru sof ki cem'an 40 top eluân sofun her bir topu otuzar zîrâ' olub gâyetde eyüşünden olmak üzere ashâmunun rızalarıyla mu'accelen işirâ ve tedârük ve kabzına me'mûr olma teslim eldirüb bir gün evvel Der-Sa'âdetime intikal”* (ASS 64: 332.)

(10) Ergeng, *Ankara ve Konya*, pp.113-116.

(11) “...ve İlehan (Lehiden) çıkar bâcî yük bâşına yüz yirmişer akça” (そしてポーランド商人から支払われる税は一荷につきそれぞれ一二〇アタクチャ) (ASS 41: 395; ASS

64: 383.)

(12) 一六八三年三月二十七日 (29 Rebi'ül-Evvel 1094) 付の別の史料においても、アンカラ徴税局の一六八二年 (ヒジュラ歴一〇九三年) 付財政の借入項目で、アングラ山羊の毛糸と綿布を取引していた幾人かの商人について言及されている。これらの名前の中には、徴税局から借入がある者としてオランダ商人 Sinor の名があることが注意を引く。史料については ASS 64: 392. を参照。

(13) Jülde Akvîz, *XVIII Yüzyılda Ankara*, Ankara Üniversitesi, Basınhanası, Doktora tezi, Ankara, 2003, p.140.

(14) Elena Frangakis-Syrett, *The Commerce of Smyrna in Eighteenth Century (1700-1820)*, Athens 1992, pp.218-219.

(ヒュリヤー・タシュ アンカラ大学歴史地理学科准教授)
(齋藤優子 本学文学研究科史学専攻博士課程後期課程)

Ankara within the Context of City-Environment Relationship

by Hulya Tas

Many studies conducted on city history for many years have made comparisons between Islamic cities or Eastern Cities and Western Cities and deliberated on many discussions on a theoretical platform. The aim of this discourse is to undertake the subject from a different stance, leaving such discussions to one side and the issue emphasized here involves how cities and towns in the pre-modern era have established relations with their surroundings from the functions they have assumed. In the example of the 17th Century Ottoman Ankara we see: that the city established a three dimensional relationship with its environ from an administrative, social and economic perspective: the military - administrative and judicial relationship it has formed with its close surroundings: a relationship on an intermediate scale exceeding the sanjak's borders and thus, a long-distant relationship extending to foreign countries. The second and third dimensions are a result of the wool cloth production and trade encountered within the industrial and commercial activities of Ankara as well as bringing about a very special form of organization: *The Mukâta'a organization*. Thus, the discourse will undertake the three dimensional relationship of Ankara and its environs as well as make analysis's on the second and third dimensions which are not observed in every city in the light of documental data.

都市と周辺地域とのつながりにおけるアンカラ（ヒュリヤー）